

「円谷幸吉の遺書」 円谷幸吉

(参考文献「オリンピックに奪われた命」橋本克彦)

紹介者：榎本博康

[紹介]

〈便箋一枚目〉

父上様 母上様 三日とろろ美味しう
ございました、干し柿、もちも美味しうござい
ました、
敏雄兄、姉上様、おすし美味しうござい
ました、
勝美兄姉上様、ぶどう酒、リンゴ美味
しうございました、
巖兄姉上様、しそめし、南ばんづけ美味しう
ございました、 (中略)

〈2枚目〉

父上様母上様、幸吉は、もうすっかり
疲れ切ってしまつて走れませんが、
何卒 お許し下さい。
気が安まる事なく、御苦勞、御心配をお
掛け致し申し訳ありません、
幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました、

〈3枚目〉

(中略) メキシコオリンピックの御成功を祈り
上げます、
一九六八・一

(注)行代えは原文の通り。

[感想]

私自身がこのシリーズの中で、安易かつ恣意的に円谷幸吉の遺書を用いるべきでないと言った手前、これを取り上げるのに大いに迷ったが、考えが深まればまた書けばいいと、気楽に考えることにした。シドニー・オリンピックが近い(2000年6月執筆)。

本シリーズでは、ランナーの伝記とか、ランナー自身による随想とかは採り上げていない。文学などのフィクションで、ランニングがどのようなシンボルとして描かれているかを採り出し、ランニングの意味を深めることを目標としている。しかし円谷の遺書の強烈さゆえ、どうしてもとりあげたかった。

私は文学でも映画でも、幸せである状態、自分が自分である状態を描き尽くした上で、そうではない現在をつつましく語ることで、深い説得力を得ると思っている。三日とろろは彼の故郷の福島県須賀川では、もちに飽きた正月の三日の夕べに食べる習慣のものだそうだ。粘りが

強い須賀川特産の「にぎり芋」を、鰹出汁のみそ汁を混ぜてすり下すものだそうだ。この三日とろろをはじめとして、家族の一人ひとりへの食べ物を通じた思いやり、まだ日本が貧しい頃の、子沢山の家の末っ子、幸吉の視点からのつつまじやかな幸せの表現である。

彼の自死と共に、この遺書に誇張ではなく日本中が驚いた。以下はほとんどが本参考文献および他の文献の孫引きであり、心苦しいが、列挙する。

彼の死は1968年1月9日に発見されたが、三島由紀夫は1月13日に産経新聞に追悼文を寄せた。本書によれば、「それは傷つきやすい、雄雄しい、美しい自尊心による自殺であった。」と、受けとめ、世間でいうノイローゼとか敗北とか規定するのは、生きているものの醜い思い上がりであると怒りを表明した。

川端康成は雑誌「風景」3月号に、繰りかえされる食べ物の御礼が、「遺書全文の韻律をなしてある。美しく、まことで、かなしいひびきだ」と評したという。

その他、雑誌「文芸」3月号で詩人・評論家の松永伍一が「血族共同体への回帰とその反逆」と題し、「ひとりの百姓が死んだ。」との書き出しで長文を掲載した。

寺山修司、佐藤信、唐十郎は劇中にこの遺書を引用した。そしてノンフィクションライターの沢木耕太郎は「長距離ランナーの遺書」を著わした。そして皆さん、ピンク・ピクルスを覚えているだろうか。1972年に「一人の道」と題して、彼のことを歌った。このようにスポーツ界以外での反響が大きかった。

しかし、三島由紀夫は1970年11月25日に市谷陸上自衛隊で自刃し、川端康成は1972年4月16日に逗子のマンションでガス自殺を遂げた。偶然の符合とは思いますが、気になる所だ。

彼の死の真相は本参考文献に詳しい。当時の自衛隊がマラソン・トレーニングを知らず、メダル至上主義で彼を追い詰めたものだとしている。それはそれとして、円谷幸吉にとってランニングとは何だったのだろうか。自己実現とか、なまっちょろいものではない。マラソンとは彼自身を追い抜いていった、もう一人の彼自身であったのだろうか。周囲の期待を一身に集めたランナー円谷が、期待通りに走り続けることができず疲れ切った彼を置いていった後に、三日とろろの幸吉が残った。でもそれは遠い追憶の世界であり、それからの未来に繋がるものではなかった。

1969年7月、実家の横に「円谷幸吉記念館」が完成した。父幸七と母ミツはここで寝起きし、両親の側で暮らしたいという遺書の願いを実現した。既に両親は他界し、記念館は長兄の敏雄氏が守り続けているという。死亡と推定される8日、そして18日、28日が休館である。

また須賀川市では、毎年11月第二土曜日の「松明あかし」の翌日に、「円谷幸吉メモリアルマラソン」（ハーフ、10キロ等）を開催しており、二千人を超える参加者があるという。

(初稿2000.6.11)

[リバイバル感想]

2020東京オリンピックの聖火リレーが2021年3月25日に福島県から始まった。（未来の読者へ、年が間違っているではありません。）その福島県区間の最終日である27日の日の最終ランナーは君原健二氏(80)であった。福島民友新聞には、「(氏は)この日の朝、須賀川市にある円谷の墓前で「一緒に務めましょう」と誓った。前回東京五輪で力走する円谷の写真をシャツに入れ、シューズは57年前に自身が履いた復刻版を用意。亡き盟友と共に大役を果たす覚悟で臨んだ。」と書かれている。

円谷が自死した年の10月にメキシコオリンピックのマラソンがあり、君原は銀メダルに輝い

た。円谷の遺志を受け、また並々ならぬ決意と周到な高地トレーニングで臨んだものと推察する。

私ごとで場違いだが、2007年8月にメキシコシティ国際マラソンに参加した。メキシコ駐在経験のある友人から、あんな2,200mもの高所で走れるはずがない。夜、寝ていて頭痛がするくらいだ、と忠告された。私の登山経験では3千メートルクラスになると体が重い、2千メートルクラスでは特に感じていなかったの、はっきり言ってなめていた。空気が薄いのであれば、少し余計に呼吸すれば良いだろうとも。高地トレーニングなどするはずもない。

当日の朝、暗い中で号砲が鳴る。どっと集団が走り出す。私も調子よくスタートしたが、ほどなく体が重くなる。全く体の様子が違うのだ。そこでぐっとスピードを落として、酸素収支のバランスをとった。しかし時すでに遅く、頭がボーっとしている。ボーっとしたままで歩を進めた。沿道の舞台の上で、民族衣装の若い女性達がライフル銃を高々と差し上げて踊っている。練習せずにマラソンを完走することを目標としている私でも、準備不足を痛感した。10kmくらいでやっと頭のもやが晴れたが、足はなかなか戻らなかった。改めて君原健二氏のすごさを実感した。

私をもっとも最近に君原健二氏を見かけたのは、2001年11月の第1回おのみち百島（ももしま）アミーゴマラソンであった。氏は招待選手であったが、コースが島を2周なので、途中で追い抜かれる形でお会いできた。参加者はわずか215名なので、2周目ともなれば周囲には誰も居ない。木陰になった上り道のカーブでご挨拶ができた。

話を戻そう。本稿の主役は円谷幸吉氏だ。そして何をさらに語るができるのだろうか。いまだにスポーツ界では内部での陰湿な事件が報道される。私は以前から、スポーツ界というものに懐疑的で、もちろん全ての競技では無いだろうが、選手が主人公とは必ずしも言えない実態があるように感じている。



第1回おのみち百島アミーゴマラソンにて
(左より筆者、間寛平氏、竹田フル百回楽走会会長(当時))